

## アジア系留学生の専門的ヘルパーに対する被援助志向性と 社会・心理学的変数の関連<sup>3</sup>

水野 治 久<sup>1</sup> 石 隈 利 紀<sup>2</sup>

アジア系留学生の専門的ヘルパーに対する被援助志向性に関連する社会・心理学的変数を抽出するために、質問紙調査が実施された。国立大学に在籍する韓国、中国、台湾のアジア系在日留学生を対象に調査を行い、264票の質問紙が回収された。学習・研究、心身健康、対人関係、住居・経済領域の被援助志向性が尋ねられた。分析の結果、学習・研究領域の被援助志向性には留学生専門的ヘルパーからのサポート経験が有意な関連を示した。心身健康領域では、ヘルパーの呼応性への心配が負の関連、留学生専門的ヘルパーからのサポート経験が正の関連を示した。対人関係領域においては、女性であることが正の関連、ヘルパーの呼応性への心配が負の関連、留学生専門的ヘルパーからのサポート経験が正の関連を示した。最後の住居・経済領域では、女性であることが正の関連、配偶者と同居している留学生が負の関連、ヘルパーの呼応性への心配が負の関連、留学生専門的ヘルパーからのサポート経験が正の関連を示した。研究成果の留学生援助への応用が検討された。

キーワード：被援助志向性、留学生専門的ヘルパー、留学生、ヘルパーの呼応性への心配、介入

### はじめに

留学生受け入れに伴い、国立大学を中心に留学生の援助や相談を担当する教官が配置され、その実践をもとに、留学生援助のあり方についての議論が展開されるようになってきた（例えば、井上, 1997; 井上・伊藤, 1998; 鈴木ら, 1995; 田中, 1993）。

一方で、留学生の異文化適応の研究は、米国を中心に議論が展開されている（Anderson, 1994; Church, 1982）。留学生の援助と適応の関連を調べた研究では、この関連は概ね認められている（田中, 1998）。このことから、留学生援助のためには、インフォーマルなサポートを含めたソーシャルサポートをどのように構築するかが必要不可欠であると言える。

しかしながら、ソーシャルサポートと適応の関連を細かく見ていくと、援助の供給者（Jou & Fukuda, 1995）や時期（周, 1995）によっては、援助が適応に効果的でない場合がある。このことは、留学生のソーシャルサポートの研究や実践が、サポートの供給者や時期、サポートの方法論といった、細かい変数を検討する必要性を示すものである。そこで、本研究では、留学生相談を

担当する援助者について限定して検討したい。これにより職業的な援助者がどのようなサポートを供給したら良いかについて実践的な知見を得ることが出来る。このような実践的な知見の蓄積は、実践の科学としての異文化間カウンセリング、異文化間臨床心理学の領域としての確立を促すものである。

米国では留学生などの文化背景の異なる人は、同じ民族を援助者として好み（Tedeschi & Willis, 1993）、問題領域によっては、アメリカ人学生と比較すると援助を求めない傾向（Mau & Jepsen, 1990）があると指摘されている。我が国においては、松原・石隈（1993）が、留学生の留学生相談室への来談状況を調査した。その結果、人間関係や文化の問題を相談する留学生は少なかったことから、留学生は心理的な問題を日本人カウンセラーやアドバイザーに相談することに抵抗があるかも知れないと指摘している。水野・石隈（1998）は、留学生が誰に援助を求めるといった認知的な枠組みを「被援助志向性」と定義し、アジア系留学生239名を対象に、被援助志向性と適応の関連を調べた。その結果、専門的ヘルパー（カウンセラー・留学生アドバイザー）、役割的ヘルパー（指導教官・日本語教師・留学生事務担当者）への被援助志向性と関連がみられた適応領域は学習、住居、経済に関する領域であったとし、この領域では被援助志向性を高めることで留学生を援助できるとしている。しかしながら、心身の健康、日本人や教職員との人間関係、日本文化に関する適応領域については専門的・

<sup>1</sup> 一橋大学法学研究科 〒186-8601 東京都国立市中2-1-1 橋大学法学研究科 e-mail: MIZUNO.Haruhisa@srv.cc.hit-u.ac.jp

<sup>2</sup> 筑波大学心理学系

<sup>3</sup> 本研究は、平成10年度文部省科学研究費奨励研究(A)（課題番号：10710041）の助成を受けた。

役割的ヘルパーへの被援助志向性との関連は認められなかった。関連のなかった適応領域については、留学生はこうした領域の援助を受けないか、留学生が援助を受けることに抵抗があるために、援助を受けても適応に結びつかないのかも知れない。

被援助志向性と適応に関連のなかった領域については、その原因を明らかにする研究が積み上げられる必要がある。しかし一方で、留学生に対する効果的な援助方法を模索するためには、被援助志向性そのものを研究対象とし、どのような取り組みをしていけば、留学生がスムーズに援助を受けることができるかという研究が必要である。

こうした被援助志向性に関する研究は、米国を中心に1970年代から研究が積み上げられてきた。水野・石隈(1999)は、米国の研究成果をレビューし、被援助志向性、被援助行動に影響を与える変数として、性差、年齢、教育レベルや収入、文化背景の違いの「デモグラフィック要因」、ソーシャルサポート、事前の援助体験の有無が含まれる「ネットワーク変数」、自尊心、帰属スタイル、自己開示などの「パーソナリティ変数」、「個人の問題の深刻さ、症状」を指摘している。これらの変数を細かくみていくと、例えば、デモグラフィック要因については、男性よりも女性の方が高い被援助志向性を示すこと(Fischer & Farina, 1995; Garland & Zigler, 1994; Rickwood & Braithwaite, 1994)、若者と高齢者の被援助志向性が低く(Leaf et al., 1987)、高い学歴や収入が被援助志向性と正の関連を示すこと(Tijhuis et al., 1990)が明らかになっている。ネットワーク変数においては、家族からのサポート得点の低い人(Goodman et al., 1984)や事前に心理学の専門家からの援助経験のある人(Halgin et al., 1987)が高い被援助志向性を示すことが明らかになっている。パーソナリティ要因では自尊心の低さ(Gross et al., 1979)やメンタルヘルスサービスに自己開示する人(Tijhuis et al., 1990)は援助を求めやすいという指摘がある。また、本人が抱えている問題の深刻さ、症状も、被援助志向性と正の関連がある(Phillips & Murrell, 1994; Rickwood & Braithwaite, 1994)。

このような変数の他に、援助に対する意識を「治療不安(treatment fearfulness)」という観点から捉え、この不安の高い人は治療を回避する傾向があることを指摘した研究がある。治療不安を測定する「心理療法に対する意識尺度(the thoughts about psychotherapy survey)」には4つの因子が指摘されている。まず、Pipes et al., (1985)によって、セラピストとの関係やセラピストの能力に関連する「セラピストの応答性(therapist responsive-

ness)」、カウンセリングに行くことで自分自身や周囲からどのように見られるかを心配する「イメージへの心配(image concerns)」が指摘された。次に、Kushner & Sher (1989)により、治療の中でクライアントの意志に反して考えさせられたり、発言させられることへの不安である「強要への心配(coercion concerns)因子」が加わり、最後に、Deane & Chamberlain (1994)により治療を受けていることで職場の仲間などから汚名を着せられることへの不安である「汚名への心配(stigma concerns)」の因子が追加され、4因子からなる心理療法に対する意識尺度が作成された。それぞれの研究者により、治療回避群の治療不安得点が高いことが明らかになっている。

以上のように、被援助志向性には数々の変数に関連している。そこで、本研究では被援助志向性に影響のある変数を抽出する基礎的な研究を行う。具体的には、性差、年齢、専門的ヘルパーからのサポート、住居形態、治療不安、また本研究が留学生を対象とすることから、日本語能力、日本での滞在期間と被援助志向性の関連を明らかにする。これにより、留学生の被援助志向性に関する臨床的介入への手がかりが得られるという実践的成果だけでなく、広義の援助行動について主に実験的なアプローチから研究している社会心理学の研究成果(Nadler, 1998; 西川, 1998)との統合のための第一歩が踏み出せるという理論的な意義もある。

## 方 法

### 1. 調査対象

調査対象は関東甲信越地区、東海地区、中国地区の留学生センターに留学生相談室が設置されている国立大学の社会科学系学部在籍する、中国、台湾、韓国の留学生384名であった。調査対象の留学生を中国、台湾、韓国の3カ国に限定したのは、我が国における留学生の74%程度(文部省学術国際局留学生課, 1999)がこの3カ国からの留学生であり、この3カ国の留学生を検討することで、留学生を対象とした援助の基礎的な資料を蓄積できると考えたからである。また、対象とした留学生は日本人学生と一緒に授業を受けている学部生、大学院生とし、日本語予備教育課程の留学生は対象外とした。対象とした留学生は、基本的な日本語力は身につけていると言える。

調査期間は1998年10月1日～11月30日である。調査票は郵送や留学生個人用メールボックスを利用し配布され、所属学部、研究科全員に行き渡るようにした。296票を回収し、記入漏れがあるもの、回答が雑で結果

が読みとれない32票は無効票とし、最終的に264票を有効回答とした。有効回答率は68.8%である。

質問紙は日本語で作成され、韓国語と中国語(繁体字版・簡体字版)に翻訳された。翻訳の適切さはバックトランスレーションにより確かめられた。対象者の属性はTABLE 1のとおりである。

TABLE 1 対象者のデモグラフィック要因

性別	男性 145名(54.9%)	女性 119名(45.1%)
平均年齢	28.68歳(標準偏差 5.07)	
出身国	韓国 59名(22.3%)	中国 159名(60.3%)
	台湾 46名(17.4%)	
大学での所属	学部 76名(28.8%)	
	大学院研究生 50名(18.9%)	
	大学院修士課程 76名(28.8%)	
	大学院博士課程 62名(23.5%)	
滞在期間	1年未満 36名(13.6%)	
	1年以上2年未満 46名(17.4%)	
	2年以上3年未満 43名(16.3%)	
	3年以上4年未満 31名(11.7%)	
	4年以上5年未満 38名(14.4%)	
	5年以上6年未満 20名(7.6%)	
	6年以上7年未満 21名(8.0%)	
	7年以上 29名(11.0%)	
日本語能力	初級 28名(10.6%)	中級76名(28.8%)
	上級 160名(60.6%)	
未婚か既婚でも配偶者と同居していない人	189名(71.6%)	
既婚でかつ配偶者と同居	75名(28.4%)	

## 2. 測度

### 1) 被援助志向性

被援助志向性は、水野・石隈(1998)により「留学生が誰に援助を求めるといふ認知的な枠組み」と定義されている。本研究では、専門的ヘルパーに対してどの程度、援助を求めるといふ程度(量)に注目し、被援助志向性を「留学生が援助をどの程度求めるといふ認知的枠組み」と定義した。

被援助志向性は具体的には、学習・研究、心身健康、対人関係、住居・経済のそれぞれのサポート領域について、この領域で問題が認められた場合、専門的ヘルパーに援助を求めるといふかを5件法(1.全くあてはまらない<1点>~5.非常によくあてはまる<5点>)で尋ねた。

石隈(1996)は、対人援助に関わるヘルパーを専門的ヘルパー、役割的ヘルパー、ボランティアヘルパーの

3つに分類し、専門的ヘルパーを「援助サービスを日常の仕事の中心としている人」と定義している。

本研究ではこの定義を留学生にあてはめ、留学生に関わる専門的ヘルパーを留学生センター生活指導部門教官・留学生専門教育教官とし、留学生専門的ヘルパーと命名した。実際の質問紙においては、留学生専門的ヘルパーの他に、保健管理センターの医師・カウンセラー、留学生事務担当者、指導教官、日本語教師、同国人留学生、チューターなどの留学生を取り巻く様々なヘルパーについて質問をした。すなわち、調査対象者は問題解決の手段として誰にどの程度援助を求めるかを、様々なヘルパーを念頭に置きながら、提示された4つの問題領域について回答したことになる。

被援助志向性において測定するサポートの種類については木島(1995)、浦(1992,1999)を参考に、道具的サポートと社会情緒的サポートの2つの種類を設定した。浦(1992)によると、道具的サポートは「何からのストレスに苦しむ人にそのストレスを解決するのに必要な資源を提供したり、その人が自分でその資源を手にいれることができるような情報を与えたりするような働きかけ」を意味し、社会情緒的サポートは、「ストレスに苦しむ人の傷ついた自尊心や情緒に働きかけてその傷を癒し、自ら積極的に問題解決に当たれるような状態に戻すような働きかけ」を意味する。

本研究では、留学生にとってサポートが必要な領域として、学習・研究、心身健康、対人関係、住居・経済の4つの領域を設定した。この領域それぞれに、道具的サポートと社会情緒的サポートの両方が必要とされるが、留学生の援助の場面を考えてみると、学習・研究、対人関係、住居・経済で得られるのは情報のサポートを含む道具的サポートが鍵であり、心身健康領域では社会情緒的サポートが重要である。

このような理由から本研究では、学習・研究、対人関係、住居・経済領域を道具的サポート領域とし、心身健康領域を社会情緒的サポート領域とした。

なお、各領域のサポートの内容を特定するために領域毎に問題状況を示し質問した(TABLE 2参照)。

### 2) 基本的属性

TABLE 2 各領域の被援助志向性の内容

サポートの種類	領域	設定された問題状況
道具的サポート領域	学習・研究領域	履修の方法や勉強の内容、言葉の意味が理解できない時、それを説明してほしいとき
	対人関係領域	日本人(指導教官、日本人学生)との付き合い方の方法やコツを教えてほしいとき
	住居・経済領域	留学生に対する奨学金、住居、アルバイトの情報を教えてほしいとき
社会情緒的サポート領域	心身健康領域	落ち込んで元気がないときに、話を聞き、精神的に支えてほしいとき

基本的属性として、性別、年齢、日本における滞在期間、日本語能力、婚姻及び配偶者との同居の有無が測定された。性別は男性に0点、女性に1点を与えた。婚姻及び配偶者との同居の有無については、未婚か既婚でも現在配偶者と同居していない留学生に0点を与え、既婚かつ現在配偶者と同居している留学生に1点を与えた。年齢は19歳から46歳までのレンジ(平均28.7歳)を持っていた。日本での滞在期間は、1年未満を1点とし、14点(13年)までのレンジであった(平均値4.19点)。日本語能力は自己評定で初級(1点)、中級(2点)、上級(3点)とした(TABLE 1参照)。

### 3) 援助不安

Pipes et al., (1985), Kushner & Sher (1989) 及び Deane & Chamberlain (1994) が開発した治療不安尺度を参考に、留学生が援助に対して持つ主観的な不安を測定することにした。質問項目は、在日留学生の状況を考慮しながら治療不安尺度の4つの因子である「セラピストの呼応性」、「イメージへの心配」、「汚名への心配」、「強要への心配」を心理学系研究者3名で検討した。その結果、留学生の援助場面を想定すると、「セラピストの呼応性」、「イメージへの心配」、「汚名への心配」に関する項目が妥当であるとし、在日留学生に合うように、各項目の表現の訂正、項目の削除及び追加を行い、「セラピストの呼応性」7項目、「イメージへの心配」1項目、「汚名への心配」4項目、計12項目からなる援助不安尺度を作成した。「強要への心配」については、この質問項目がどちらかと言えば治療的な臨床場面を前提にしており、留学生の援助は問題解決的な援助が多いので今回は採用しなかった。「イメージへの心配」1項目については、「汚名への心配」と関連が深い項目であったので、この尺度は、「セラピストの呼応性」、「汚名への心配」の2因子構造が想定された。

作成された尺度項目について、5件法(1. 全くあてはまらない<1点>~5. 非常によくあてはまる<5点>)で質問した。得点が高いほど不安の程度が高いことを示す。なお Kushner & Sher (1989) は、治療不安という概念でメンタルヘルスに関わる不安を測定している。在日留学生の場合は、治療というより援助という表現が相応しいので、この尺度を留学生用援助不安尺度と命名した。

項目分析の結果、「イメージへの心配」、「汚名への心配」に関わる項目については、多くの回答者が「全くあてはまらない」を回答し、回答の分布の偏りがあると判断された。そこで、7項目からなる「セラピスト

の呼応性」に関する項目のみで分析することとした。

主因子法による因子分析の結果、留学生用援助不安尺度は固有値1以上あるものが1因子であった。「留学生相談室の先生は、私が話した日本語を完全には理解できないだろう」、「私は自分の問題を日本語できちんと表現できるかどうか心配だ」の2項目については、因子負荷量.4未満であったので削除し、再び主因子法を行った。この因子は、「留学生相談室の先生は留学生の問題を理解してくれないだろう」、「留学生相談室で相談したことについての秘密が守られるかどうか心配だ」のように留学生が相談したときの留学生専門的ヘルパーの呼応に関わる項目が集約された。よって、この尺度は“留学生専門的ヘルパーの呼応性への心配( $\alpha=.741$ )”と命名できる1つの要因で説明できることがわかった(TABLE 3参照)。

### 4) 留学生専門的ヘルパーからのサポート経験

最後に、留学生専門的ヘルパーからのサポート経験を尋ねた。ヘルパーの分類は被援助志向性と同じ分類を採用した。すなわち、留学生センター生活指導部門教官・留学生専門教育教官を留学生専門的ヘルパーとした。各領域毎にサポートの内容を説明している文章を示し、その下にヘルパーを列挙し、ヘルパーからもらったサポートを尋ねた。

留学生専門的ヘルパーからのサポートは、被援助志向性と同じ領域である学習・研究、心身健康、対人関係、住居・経済のそれぞれの領域について、過去1年以内にももらったサポートを5件法(1. 全くもらいませんでした<1点>~5. 非常にたくさんもらいました<5点>)で尋ねた。なお、各領域のサポートの内容を特定するために領域毎に問題状況を示し質問した。この問題状況はTABLE 2の被援助志向性と同じ内容を設定し、問題文については、ソーシャルサポートを表わすように変更を加えた。すなわち、道具的サポート領域である学習・研究領域においては、「履修の方法や勉強の内容、言葉の意味が理解できない時、それを説明してくれるよう

TABLE 3 留学生専門的ヘルパーへの呼応性への心配の因子分析結果

呼応性への心配 $\alpha=.741$	I
留学生の問題を理解してくれないだろう	.782
相談した問題を真剣に扱ってくれないだろう	.745
私が相談したことを解決できないだろう	.571
相談したことについて秘密が守られるかどうか心配だ	.496
私の問題は同じ文化の人しか理解できないので、日本人である留学生相談室の先生は問題を理解できないだろう	.471
因子負荷量の2乗和	1.961
寄与率	50.348%

なサポート」, 対人関係領域においては「日本人(指導教官, 日本人学生)との付き合い方について, その方法やコツを教えてくれるようなサポート」, 住居・経済領域では「留学生に対する奨学金, 住居, アルバイトの情報を教えてくれるようなサポート」とした。社会情緒的サポート領域である心身健康領域では「落ち込んで元気がないときに, 話を聞き, 精神的に支えてくれるようなサポート」とした。

以上の変数の平均値及び標準偏差は TABLE 4 に示すとおりである。

## 結 果

各領域の被援助志向性に関連のある変数を抽出することを目的に重回帰分析を実施した。独立変数は, 性差, 年齢, 日本での滞在期間, 婚姻及び配偶者との同居の有無, 日本語能力, ヘルパーの呼応性への心配, 各領域の留学生専門的ヘルパーからのサポート経験であった。従属変数は学習・研究, 心身健康, 対人関係, 住居・経済領域における留学生専門的ヘルパーへの被援助志向性であった。この独立変数は過去の研究において被援助志向性との関連が確認されているので変数の投入は同時に行った。その結果, 4つの重回帰分析の説明率(R<sup>2</sup>)はいずれも有意であり, 各領域ともに23.4%~27.7%の範囲で投入した独立変数で従属変数を説明できることがわかった(TABLE 5 参照)。

学習・研究領域はサポートの量と被援助志向性は正の関連を示した。他の独立変数との関連は認められなかった。

心身健康領域については, ヘルパーの呼応性への心配と被援助志向性は負の関連, サポートの量と被援助

TABLE 4 各変数の平均値及び標準偏差

変数	平均値	標準偏差
性差	.451	.499
年齢	28.678	5.073
滞在期間	4.189	2.546
配偶者との同居	.284	.452
日本語能力	2.500	.681
呼応性への心配	9.822	3.507
学習・研究領域のサポート	2.155	1.120
心身健康領域のサポート	1.650	.875
対人関係領域のサポート	1.606	.829
住居・経済領域のサポート	1.794	.980
学習・研究領域の被援助志向性	2.148	1.174
心身健康領域の被援助志向性	2.057	1.157
対人関係領域の被援助志向性	2.320	1.227
住居・経済領域の被援助志向性	2.655	1.280

TABLE 5 留学生専門的ヘルパーに対する被援助志向性を従属変数とした重回帰分析における各独立変数の標準偏回帰係数

独立変数	学習・研究領域	心身健康領域	対人関係領域	住居・経済領域
性差	-.049	.099	.160**	.244**
年齢	-.112	.117	.129	.085
滞在期間	.053	-.050	-.076	-.103
配偶者との同居	-.029	-.023	-.066	-.131*
日本語能力	-.110	.056	.046	-.030
呼応性への心配	-.104	-.165**	-.111*	-.131*
留学生専門的ヘルパーからのサポート	.412**	.485**	.444**	.394**
説明率(R <sup>2</sup> )	.255**	.277**	.234**	.265**

\*p<.05 \*\*p<.01

志向性は正の関連が認められた。

対人関係領域については性差と被援助志向性の関連が確認され, 女性であることが被援助志向性と正の関連があった。また, この領域ではヘルパーの呼応性への心配が被援助志向性と負の関連, サポートの量は被援助志向性と正の関連を示した。

住居・経済領域においては, 性差と被援助志向性の関連が確認され, 女性であることが被援助志向性と正の関連が認められた。また, 婚姻及び配偶者との同居の有無においても関連がみられ, 配偶者と同居している人は被援助志向性と負の関連を示した。ヘルパーの呼応性への心配は被援助志向性と負の関連, サポートの量は被援助志向性と正の関連が認められた。

## 考 察

まず, 本研究で作成した留学生用援助不安尺度について言及したい。先行研究で抽出された「イメージへの心配」, 「汚名への心配」に関わる項目は回答の分布に偏りが認められたため, この尺度には採用されなかった。このことは, 留学生の援助不安にはヘルパーの呼応性に関する項目のみが関連している可能性を示すものである。これは, 留学生の相談には問題解決的なものが多いこととの関連が推測される。今後は, こうした観点からも援助不安が検討されなければならない。

次に, 結果について考察したい。本研究ではアジア系留学生の留学生専門的ヘルパーへの被援助志向性に関連する変数の抽出を試みた。

学習・研究領域においては, サポートの量のみが被援助志向性と関連が認められた。これは, サポートをより多く受けていることで被援助志向性の向上につながることを意味している。

心身健康領域においては、ヘルパーの呼応性への心配が負の関連、サポートの量は正の関連であった。つまり、呼応性への心配を低くする介入と同時に、サポートを受けやすくする配慮が心身健康領域での被援助志向性を高めることにつながる。

対人関係領域では、女性の方が男性より高い被援助志向性であることが示された。Good et al. (1989) は、男子大学生の調査から他の男性に感情や情動を表わすことへの心配という伝統的な男性の役割意識が心理専門家へ援助を求めることと負の関連があったとしている。この結果は、性差が直接、被援助志向性に関連しているのではなく、性にまつわる役割意識が被援助志向性と関連している可能性を示すものである。今後は、性にまつわる意識と被援助志向性の関連を探ることで、コントロール可能な変数を抽出できる可能性がある。対人関係領域でこの他に関連がみられた変数は、ヘルパーの呼応性への不安が負の関連、サポートの量が正の関連を示した。性差を考慮しながらも、ヘルパーに対する心配を低くする介入と同時に、サポートを受けやすくする配慮が対人関係領域の被援助志向性を高めることにつながると言える。

住居・経済領域においても、性差と被援助志向性は正の関連がみられた。次に配偶者と同居している人の被援助志向性が低いことが明らかになった。これは、配偶者と同居している人は生活が安定し、住居・経済といった生活の基盤を構成する要素については既に整備されているので、援助を求める必要がないために被援助志向性が低くなったのではないかと推測できる。この他の変数については、ヘルパーの呼応性への心配は負の関連、サポートの量は正の関連が認められた。この領域においても、性差や現在の居住形態の問題を考慮に入れながら、援助に対する不安を低くする介入と同時に、サポートを受けやすくする配慮が住居・経済領域の被援助志向性を高めることにつながると言える。

次に、学習・研究、心身健康、対人関係、住居・経済の4つの領域の被援助志向性を相互に比較してみた。学習・研究領域は唯一、呼応性への心配の影響がなかった領域である。学習・研究領域の援助は、大学で最も日常的に行われているために、留学生もこの領域で援助を求めることに対して、不安を抱かないのかも知れない。一方で、心身健康、対人関係、住居・経済領域は学習場面とは別の問題領域である。そのため、留学生がこうした問題をヘルパーに相談するときは、ヘルパーの呼応性が気になってくるのかも知れない。

全ての領域の被援助志向性に影響があった変数は留

学生専門的ヘルパーからのサポート経験である。サポートと被援助志向性の関係は、被援助志向性の高い留学生が実際にヘルパーからサポートを得られ、それがまた高い被援助志向性に結びついている可能性がある。この場合の被援助志向性とサポートの関連は循環的である。逆に、被援助志向性の低い留学生は、サポートを得ることができないので、被援助志向性を高める機会がない。このように考えると、単純にサポートを供給するだけで、被援助志向性を高めることができるかどうかについては疑問が残る。この点は今後の研究の課題としたいが、被援助志向性が低くても援助を受けられる体制作りも考えていく必要がある。

こうした留学生の被援助志向性の構造を視野に入れた上で現場の留学生援助担当者とはどのような点に留意すれば良いのかを考えてみたい。ここでは、①被援助志向性への介入の方法、②被援助志向性を意識したカウンセリング技法の開発、③予防・開発的アプローチの3点を指摘したい。

①被援助志向性の介入の方法については、学習・研究領域は、留学生専門的ヘルパーの援助を受けやすくすることが留学生の被援助志向性を高めることにつながる。しかしながら、心身・健康、対人関係、住居・経済領域においては留学生の性差や呼応性への心配を考慮に入れる必要がある。具体的には、オリエンテーションなどの場で、留学生の援助体制やその内容について説明し、先輩留学生の体験談の中で、援助の効果を説明してもらうことなどが考えられる。

次に、②被援助志向性を意識したカウンセリングの方法を開発する必要がある。例えば、Sue & Zane(1987)は少数民族に対するカウンセリングにおいては、クライアントに直接的な効果を認識させることの必要性を指摘している。留学生が学習・研究領域以外の問題を持ち込んできた場合は援助者の呼応性に不安を感じている可能性があるため、こうした不安を取り除くように、効果を早く認識させるような問題解決型のカウンセリングを行うことが考えられる。

最後に、心理教育などの③予防・開発的アプローチを併用することも検討されるべきである。加賀美(1998)は留学生の介入手段として相談室で個別的に相談を行う「治療モデル」的な関わりだけでは限界があり、コミュニティ心理学の発想と方法に基づいた予防・教育的アプローチの導入を試みているが、こうしたアプローチは、被援助志向性が低くても利用できるサービスである。また、被援助志向性の低い留学生がこのサービスを利用することで、被援助志向性を高められる可

能性もある。

### おわりに

以上のようにアジア系留学生の専門的ヘルパーに対する被援助志向性は領域ごとに違いはあるものの、独立変数には一定の説明力があることがわかった。ここでは、本研究の課題を5点指摘したい。

①本研究の質問紙調査は、31.2%の留学生が回答しなかったり、回答しても無効回答であった。質問紙を回答しなかった留学生の動向そのものが、被援助志向性と関連している可能性があるため、本研究の結果も限定的に捉えられなければならない。

次に、③重回帰分析の独立変数の説明率( $R^2$ )は各領域ともに23.6~26.5と決して高くない。これは、今回投入した独立変数以外に被援助志向性に影響のある変数が存在する可能性を示すものである。自尊心などのパーソナリティ要因(水野・石隈, 1999)についても調べる必要がある。

また、③今回の研究はヘルパーの呼応性への心配や性差、ヘルパーからのサポート経験などの変数と被援助志向性の関連が確認されたが、これはあくまでも相関であり、因果関係ではない。今後は、被援助志向性に関連のある変数を特定していく作業が必要であろう。

加えて、④ヘルパーからのサポート経験と被援助志向性は循環的な関係がある可能性がある。今後はこのサポートと被援助志向性の関係に絞って細かくその構造を把握する必要がある。

最後に、⑤本研究の被援助志向性の測定方法について述べたい。被援助志向性については、留学生専門的ヘルパーに援助を求める程度を質問した。今回の研究は被援助志向性の初期的研究であるためにこのようなシンプルな方法で質問したが、今後は工夫の余地が残されている。また、被援助志向性の領域については、例を用いて限定的に捉えた。このことが対象者が描いている被援助志向性のイメージに制限を加える結果になった可能性がある。今後は、方法論にも留意し、多様な角度から被援助志向性を捉える必要がある。

### 引用文献

- Anderson, L.E. 1994 A new look at an old construct : Cross-cultural adaptation. *International Journal of Intercultural Relations*, 18, 293—328.
- Church, A.T. 1982 Sojourner adjustment. *Psychological Bulletin*, 91, 540—572.
- Deane, F.P., & Chamberlain, K. 1994 Treatment fearfulness and distress as predictors of professional psychological help-seeking. *British Journal of Guidance and Counselling*, 22, 207—217.
- Fischer, E.D., & Farina, A. 1995 Attitude toward seeking professional psychological help : A shortened form and considerations for research. *Journal of College Student Development*, 36, 368—373.
- Garland, A., & Zigler, E.F. 1994 Psychological correlates of help-seeking attitudes among children and adolescents. *American Journal of Orthopsychiatry*, 64, 586—593.
- Good, G.E., Dell, D.M., & Mintz, L.B. 1989 Male role and gender role conflict : Relations to help seeking in men. *Journal of Counseling Psychology*, 36, 295—300.
- Goodman, S.H., Sewell, D.R., & Jampol, R.C. 1984 On going to the counselor : Contributions of life stress and social supports to the decision to seek psychological counseling. *Journal of Counseling Psychology*, 31, 306—313.
- Gross, A.E., Fisher, J.D., Nadler, A., Stiglitz, E., & Craig, C. 1979 Initiating contact with a women's counseling service : Some correlates of help-utilization. *Journal of Community Psychology*, 7, 42—49.
- Halgin, R.P., Weaver, D.D., Edell, W.D., & Spencer, P.G. 1987 Relation of depression and help-seeking history to attitudes toward seeking professional psychological help. *Journal of Counseling Psychology*, 34, 177—185.
- 石隈利紀 1996 学校心理学に基づく学校カウンセリングとは カウンセリング研究, 29, 226—329.
- 井上孝代 編 1997 異文化間臨床心理学序説 多賀出版
- 井上孝代・伊藤武彦 1998 留学生相談の実態と課題—全国高等教育機関の調査から— 学生相談研究, 19, 22—32.
- Jou, Y.H., & Fukuda, H. 1995 Effect of social support form various sources on the adjustment of Chinese students in Japan, *Journal of Social Psychology*, 135, 305—311.
- 加賀美常美代 1998 コミュニティ心理学的発想に基

- づいた留学生相談の実践活動 井上孝代編 現代のエスプリ 377号 多文化時代のカウンセリング 至文堂, Pp.96-108.
- 木島伸彦 1995 ソーシャル・サポート研究 山本和郎・原 裕視・箕口雅博・久田 満 編著 臨床・コミュニティ心理学 ミネルヴァ書房 Pp.84-85.
- Kushner, M.G., & Sher, K.J. 1989 Fear of psychological treatment and its relation to mental health service avoidance. *Professional Psychology : Research and Practice*, **20**, 251-257.
- Leaf, P.J., Bruce, M. L., Tischler, G. L., & Holzer, III, C.E. 1987 The relationship between demographic factors and attitudes toward mental health services. *Journal of Community Psychology*, **15**, 275-284.
- 松原達哉・石隈利紀 1993 外国人留学生相談の実態 カウンセリング研究, **26**, 146-155.
- Mau, W.C., & Jepsen, D.A. 1990 Help-seeking perceptions and behaviors : A comparison of Chinese and American graduate students. *Journal of Multicultural Counseling and Development*, **18**, 94-104.
- 水野治久・石隈利紀 1998 アジア系留学生の被援助志向性と適応に関する研究 カウンセリング研究, **31**, 1-9.
- 水野治久・石隈利紀 1999 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究, **47**, 530-539.
- 文部省学術国際局留学生課 1999 我が国の留学生制度の概要 受入れ及び派遣
- Nadler, A. 1998 Relationship, esteem, and achievement perspectives on autonomous and dependent help seeking. Karabenick S.A. (ed.) *Strategic help seeking : Implications for learning and teaching*. Lawrence Erlbaum Associates, Inc. NJ : Mahwah. 61-93.
- 西川正之 1998 援助研究の広がり 松井 豊・浦光博 対人行動学研究シリーズ7 人を支える心の科学 誠信書房 Pp.115-148.
- Phillips, M.A., & Murrell, S.A. 1994 Impact of psychological and physical health, stressful events, and social support on subsequent mental health help seeking among older adults. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **62**, 270-275.
- Pipes, R.B., Schwarz, R., & Crouch, P 1985 Measuring client fears. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **53**, 933-934.
- Rickwood, D.J., & Braithwaite, V.A. 1994 Social-psychological factors affecting help-seeking for emotional problems. *Social Science and Medicine*, **39**, 563-572.
- 周 玉慧 1995 受け取ったサポートと適応に関する因果モデルの検討—在日中国系留学生を対象として— 心理学研究, **66**, 33-40.
- Sue, S., & Zane, N., 1987 The role of culture and cultural techniques in psychotherapy : A critique and reformulation. *American Psychologist*, **42**, 37-45.
- 鈴木康明・堀 洋道・井上孝代 1995 異文化間カウンセリングにおけるカウンセラーの役割に関する研究—外国人留学生を対象とする事例から— 教育相談研究(筑波大学学校教育部), **33**, 17-23.
- 田中共子 1993 「留学生」相談の領域 学生相談研究, **14**, 73-82.
- 田中共子 1998 在日留学生の異文化適応：ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の視点から 教育心理学年報, **37**, 143-152.
- Tedeschi, G.J., & Willis, F.N. 1993 Attitudes toward counseling among Asian international and native Caucasian students. *Journal of College Student Psychotherapy*, **7**, 43-54.
- Tijhuis, M.A.R., Peters, L., & Foets, M. 1990 An orientation toward help-seeking for emotional problems. *Social Science and Medicine*, **31**, 989-995.
- 浦 光博 1992 支えあう人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学— サイエンス社
- 浦 光博 1999 ソーシャル・サポート 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田祐司 編 心理学辞典 有斐閣 541.



## 謝 辞

調査票に回答頂きました留学生の皆様には感謝いたします。また、調査にご協力頂いた、奥田沙織先生、永井友香先生、高野靖子先生、西田弘次先生、松瀬成子先生、八木玲子先生、吉岡美千子先生に感謝致します。

本研究に際しまして、筑波大学心理学系助教授藤生英行先生、東北大学大学院医学系研究科の富家直明氏より貴重な助言を頂きました。ここに記して感謝致します。

(1999.7.12 受稿, 12.27 受理)

*Relation of Sociological and Psychological Factors  
to Preferences Among Professional Helpers  
by Asian International Students in Japan*

HARUHISA MIZUNO (FACULTY OF LAW, HITOTSUBASHI UNIVERSITY) AND TOSHINORI ISHIKUMA

(INSTITUTE OF PSYCHOLOGY, UNIVERSITY OF TSUKUBA) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2000, 48, 165—173

The purpose of the present research was to investigate the effects of sociological and psychological factors on international students' preferences for professional helpers. A total of 264 responses was obtained from a questionnaire survey of Korean, Chinese and Taiwanese international students studying at national universities in Japan. The results showed the following : In the academic area, experiences with professional supports were positively related to help-seeking preferences. In the physical and mental areas, concerns about helper responsiveness were negatively related to help-seeking preferences, whereas experiences with professional supports were positively related to preferences in that area. In the interpersonal area, being female and having experiences with professional supports were positively related with help-seeking preferences, whereas concerns about helper responsiveness were negatively related to help-seeking preferences in that area. In the daily life and economic areas, being female and having experiences with professional supports were positively related with help-seeking preferences, whereas living with a spouse and concerns about helper responsiveness were negatively related with preferences in that area. The implications for helping international students were discussed.

Key Words : help-seeking preferences, professional helper for international students, international students, concerns about helper responsiveness, interventions